

論文

中央アジアにおける「飾られた仏陀」と支配者

山根 萌々花

「飾られた仏陀」とは、肩掛けを身に着け、冠飾などの装身具で荘厳されたブツダ像である。肩掛けによる荘厳は仏教表現に類例がなく、通常僧衣のみを纏った姿で描かれるブツダ像が装身具で荘厳される点でも特異な事例である。7～8世紀を中心に、現在のアフガニスタン東部から北部インド・パキスタンにかけての地域に確認され、ヒンドークシュ山脈とパミール高原の南側に集中することが知られている。従来の研究において、この像の装身具は実際の支配者との関係が指摘されてきた。しかし、今日までその関係を具体的に考察した研究は少なく、はっきりとした結論は得られていない。

そこで本稿では、近年の研究成果と新出資

料に基づき、「飾られた仏陀」の装身具と支配者の服飾との関係を改めて考察した。まず「飾られた仏陀」に共通する装身具である肩掛けのうち、三叉状肩掛けの系譜を考察した。従来、北方遊牧民との関係が推定されていたこの服飾は、5世紀以降中央アジアの支配的民族であったイラン系フンのエフタルとアルハンに關係することを指摘した。三叉状肩掛けから推定される「飾られた仏陀」とイラン系フンとの関係は、その他の点からも示され、「飾られた仏陀」が同集団と関係して形成されたことが推測された。その中で三叉状肩掛けと三面三日月冠を組み合わせる事例は、アルハンの支配者像を起源に持つと考えた。

I. はじめに

中央アジアの仏教の表現には、僧衣の上に豪華な肩掛けを掛けたブツダ像が存在する（第10-13図）。肩掛けのほとんどは正面観で三叉に分かれた特徴的な形状で、仏教関連の表現において他に見られない特殊な装身具である。これらの像は肩掛けに加えて、冠飾等の装身具によって荘厳される場合が多く、通常俗世から離れた行者姿で表されるブツダが装身具を身に着ける点で特異な像である。

このブツダ像の肩掛けや冠飾については、現実の支配者の服飾との関係が推測されてきた。これについて本格的に論じたのは宮治昭（1981）である。詳細は次章で取り上げるが、宮治は肩掛けを伴うブツダ像を「飾られた仏陀」として集成し、装身具の系譜から当時の支配的集団との関係に関していくつかの可能性を示した。この研究により、一連のブツダ像が「飾られた仏陀」としてはじめて包括的に議論され、その装身具と支配者との関係についての理解が進んだ。しかしその後の一連の像に関する議論は、仏教の教義からその性格を考察するものが主流であり、装身具と支配者の服飾の関係については推測として述べられることはあっても、具体的に考察されることはなかった。

本稿は2022年度に提出した卒業論文の一部を抜粋し、肩掛けを身に着ける一連のブツダ像「飾

られた仏陀」と支配者との関係を新出資料と近年の研究成果に基づいて改めて考察した内容を示す。まず「飾られた仏陀」の三叉状肩掛けについて、類似の服飾を有する資料を集成しその系譜を考察する。つづいて三叉状肩掛けが示す系譜をその他の観点から検討して「飾られた仏陀」が特定の支配的集団あるいは支配者と関係するのか解明を試みる。

Ⅱ. 「飾られた仏陀」

1. 宮治昭による装身具の系譜の考察

宮治（1981）は、京都大学中央アジア調査隊のアフガニスタン・バーミヤーン壁画の調査（1970-1978）によって明らかになった新たな例と、それらの例と同一系統に属すると考えられる中央アジアの例を取り上げ、「飾られた仏陀」の包括的な研究を行った。その中で、豪華な肩掛け冠飾を「飾られた仏陀」に特徴的で重要な要素であるとし、このブツダ像が身に着ける装身具は現実の王侯・貴族の儀礼などの特殊な場面における服飾に関係すると推測した。そして「飾られた仏陀」に見られる三叉状の肩掛け（第1図）と、バーミヤーンの事例に見られる2種類の冠飾、円盤/球体を内包した三日月「複合三日月」と鳥の翼を組み合わせた「鳥翼冠」（第2図）、三日月（バーミヤーンでは「複合三日月」）が正面と左右側面に配される「三面三日月冠」（第3図）の系譜を考察した¹⁾。

まず三叉状肩掛けは、類似の服飾を身に着ける図像資料の例から、古くはクシャーン朝期（1～3世紀）に遡り北方遊牧民に由来する服飾であると推測した。しかし、当時の資料、状況から、この服飾が具体的にどの民族と関係し、「飾られた仏陀」の装身具として利用されるようになったのかという点の解明には至らなかった。

つづいて冠飾については、貨幣の王像との対応が見られることを指摘し、ロバート・ゲーブル（Robert Göbl）（1967）の貨幣研究をもとに系譜の検討を行った。まず、鳥翼冠はサーサーン貨やそれを模倣したイラン系フンの貨幣に現れるがバーミヤーンのものとは型式が一致せず、類似の形式がイラン系フンの一派のシャーヒー・テギン系列の貨幣（710-720年頃）に現れることを示したが、結論ではあくまでサーサーンとの関わりが強い冠飾だと述べるに留めた。また三面三日月冠は、初現はアルハンの470/480年頃のキングラ貨で、アルハン系のナラナ・ナーレンドラ（570/580-600年頃）を経て7世紀の「インド・ナプスク混合型」に受け継がれ、



第1図 三叉状肩掛け

宮治 1981 図 10 より一部改変

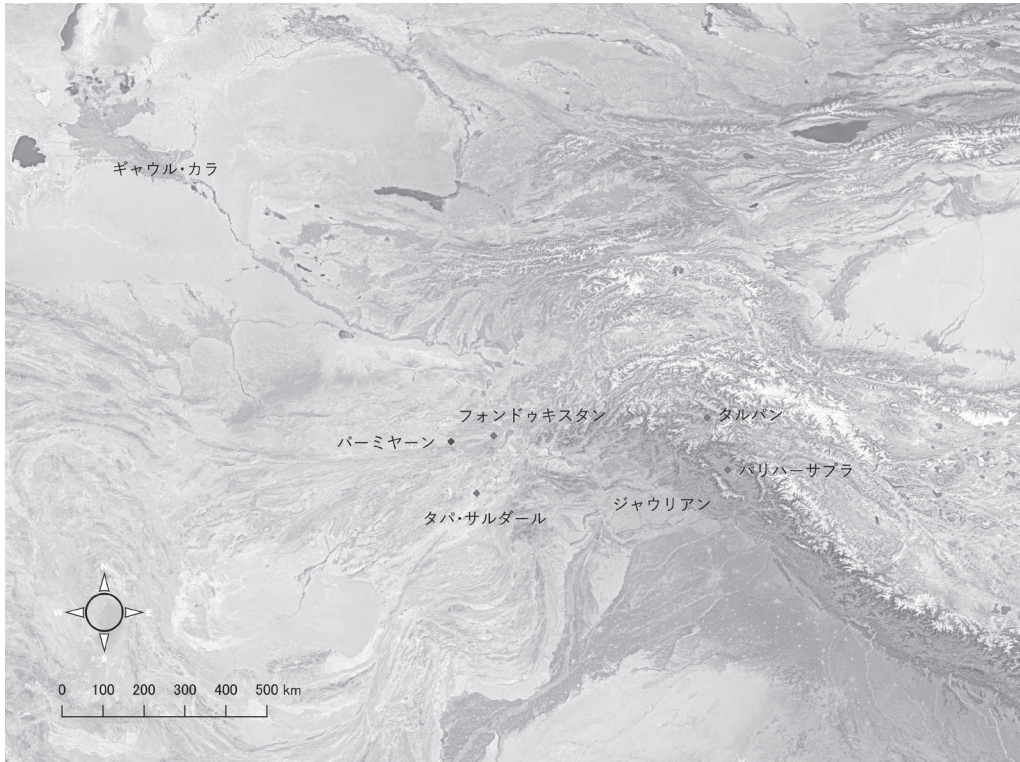


第2図 鳥翼冠



第3図 三面三日月冠

宮治 1981 図 1 より一部改変



第1地図 「飾られた仏陀」を有する遺跡

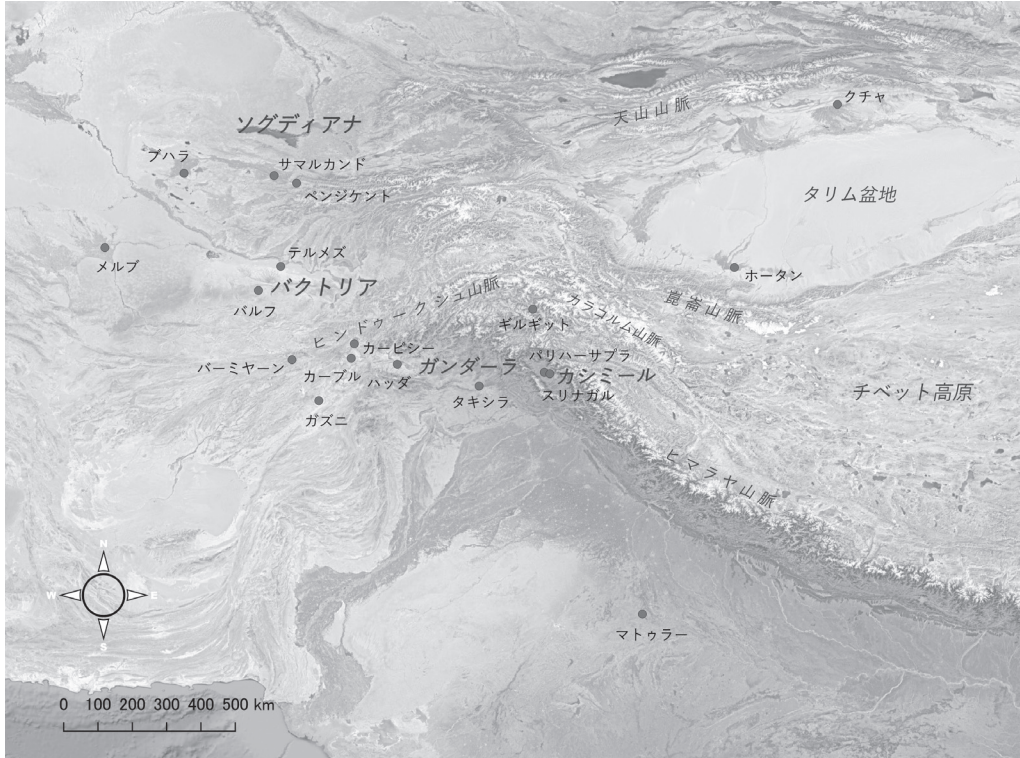
その後のカーブル・カーピシー周辺の貨幣に影響するとし、アルハン特有の伝統であることを指摘した。ここで、アルハンを文献史学においてエフタルと知られる遊牧民族の一派だと説明し、バーミヤーンの「飾られた仏陀」とエフタル系民族の関係を認めた。

宮治は冠飾の系譜から、バーミヤーンの「飾られた仏陀」とサーサーン、アルハン、イラン系フンの諸派との関係を推定したが、概略的な対応しか見いだせず、これらの関係は仮説にとどまり具体的な結論は留保された。

2. 「飾られた仏陀」の事例

肩掛けによる荘嚴はそのほかの仏教関連の表現に見られず、「飾られた仏陀」に特徴的である。このことから、本稿では肩掛けを身につけるブツダ像と一連のものと捉え、「飾られた仏陀」とみなした。

「飾られた仏陀」の事例は現在31例確認され（第2表）、その分布は現在のアフガニスタン東部からインド・パキスタン北部にかけての地域を中心とする（第1地図）。肩掛けはバーミヤーンにおいて水平に裁断されたものが2例見られる以外は（第10図 BM_BB_1, 5）、すべて三叉状肩掛けと通称される正面観から3つ叉に分かれた形状である。また多くは肩掛けに加え冠飾を伴う。いくらかの型式が見られるが、中でも三面三日月冠は地域や表現方法にかかわらず幅



第2 地図 中央アジアの主要都市と周辺の地理情報

広く表される。

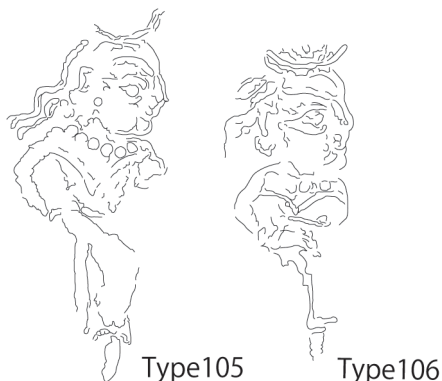
Ⅲ．三叉状肩掛けの系譜に関する考察

1. 新出資料

「飾られた仏陀」に特徴的な装身具である三叉状肩掛けは、宮治（1981）以降中央アジアの資料に類例がみられることが指摘されているが（前田 2003, Compareti 2014 など）、系譜や民族性について具体的なことは明らかにされてこなかった。しかし、近年の新出資料の中にアルハンの支配者像が類似の服飾を身に着ける例が確かめられ、類例からエフタルの支配との関係が推定されることから、イラン系ファンとの関係が想定される。イラン系ファンは、4 世紀後半以降中央アジアに現れた北方遊牧民族の総称で、貨幣の銘文や資料からいくらかの部族名が知られている。そのうちエフタルとアルハンは 5～6 世紀の中央アジアで影響力を持った部族で、貨幣の型式と分布の明確な違いからヒンドゥークシュ・パミールを境界としてそれぞれの領域を支配していたと考えられている（Göbl 1967, Alram and Pfisterer 2010, Vondrovec 2014 など）。エフタルは 5 世紀後半から 6 世紀後半までヒンドゥークシュ・パミール北部で活動し、最盛期には西はサーサーン朝領域と接し、東はタリム盆地、北は当時の突厥領までの広大な領域を



第4図 スワート出土銀杯



第5図 “zabocho” 貨

支配した。アルハンは4世紀末以降ガンダーラで支配を確立し、5～6世紀を最盛期とし7世紀中頃まで南部の地域で影響力を持ったと考えられている (Aram and Pfisterer 2010, Vondrovec 2014, Kuwayama 2002, 稲葉 2004)。両者は、貨幣に一部共通の要素が見られ、同じルーツを共有する異なる政体であったことも指摘されているが (Aram and Pfisterer 2010, Vondrovec 2014)、その関係に関しては依然不明瞭な点が多く、両者の習俗の共通性についてはこれまで十分に検証されていない。

アルハンの三叉状肩掛けを身に着ける例は、1つは現在大英博物館に所蔵されているスワート出土とされる銀碗、もう1つはアルハンの“zabocho”発行の貨幣に確認される。

まず前者の銀碗は4人の騎乗の人物が狩猟をするシーンを描いたもので、人物像の特徴からキダーラとアルハンの支配者像を表していると考えられており、そのうちのアルハンの人物の胸部に三角に垂れ下がる服飾が三叉状肩掛けの一部を表していると考えられる (第4図)。この銀碗の図像は当時のキダーラとアルハンの共同統治を反映したものと解釈されている (Errington 2010: p.149)。つづいて後者は、バクトリア語銘から“zabocho (ζ α β ο χ ο)”という人物に帰属すると考えられる貨幣 (Type105, 106)³⁾で、その騎馬像に類似の服飾が認められる (第5図)。この騎馬像はグプタ金貨からの影響が推定され、5世紀中頃～後半に位置づけられている (Vondrovec 2014: pp.205-206)。

これらのアルハンの支配者像の表現を見ると、両者とも帯状の縁取りを持ち、銀碗の方では何か文様のようなものが表現された痕跡が見られ、“zabocho”貨の方では首元に連珠の縁取りが表される。連珠という装飾から実用的あるいは軍事的な服飾ではなかったと想定される。

2. その他の事例

三叉状肩掛けは、これまでに中央アジアのいくつかの資料にみられることが指摘されてきた(宮治 1981, 前田 2003, Comparati 2014 など)。以下にそれらの事例を概観したい(第 3 表)。三叉状肩掛けの初期の事例は、ガンダーラ出土と伝わる片岩製の供養者像に見られ両者は遊牧民風の服装をしている(宮治 1981: 16 頁)(第 14 図 T1, T6)。また別の片岩製の像は(第 14 図 T5)、布地に三日月の装飾をもつ。この像は三叉状肩掛けを根拠にクシャーン系王侯像と捉えられているが(前田 2006: 165 頁)、同服飾とクシャーン系民族との関係は明らかになっていないためこの解釈には慎重を要する。

その後、推定 5 世紀代のアルハン貨や「飾られた仏陀」の事例の他、タリム盆地、ソグド語圏、カシミールに類例が認められる。タリム盆地では、推定 5 世紀以降のヨートカンのテラコッタ像の服飾にみられ(第 15 図 T2a, b)、この像は楽人を表す可能性が指摘されているものである(宮治 1981: 17 頁)。また、クチャのスバシ遺跡から出土した舍利容器の 3 人の舞人に表現される(第 15 図 T4)。この事例のその他の人物像には M 字の生え際が表現され、楽器の演奏者たちは片襟を折り返した服を身に着けているが、この髪型と服飾はエフタルの表現として認められており(II'yasov 2001, 影山 2007)、エフタル系の民族の祭事を表現している可能性がある。また出土地不明のソグド語の銘文を伴う 1 組の男女が表現された印章において、男性像が三叉状肩掛けを身に着けている(第 14 図 T9)。この印章はエフタルとの関係が示唆されている(Kurbanov 2014: p.320)。5 世紀そして 6 世紀代は、ヒンドウークシュ・パミール以北でエフタルが支配を広げる時期であり、タリム盆地とソグド語圏の表現にこの服飾が現れる背景にエフタル系民族とその支配が想定される。

同時期のヒンドウークシュ・パミール以南の地域では、カシミールにおいて 6 世紀に推定されているスーリヤ像に認められる(第 17 図 T12)(Sharma 1979)。同地域では、「飾られた仏陀」の広がりとは並行する時期にヒンドウー教でも神像に三叉状肩掛けが取り入れた可能性があり、礼拝対象の装身具として利用される特徴がある。

7 世紀以降、ヒンドウークシュ・パミール以南ではこの服飾は「飾られた仏陀」、カシミールのスーリヤ像と一部の供養者に表現される(T13-15, 18)。以北においては 8 世紀前半のソグディアナのベンジケント遺跡の壁画の複数の人物像に表される。英雄譚を表した壁画に登場するルスタム(イラン世界の神話上の英雄)の娘とも解釈される王女(第 16 図 T7)、女神像(第 16 図 T8)、何らかの英雄譚の一場面の馬に乗る女性像(第 14 図 T10)、ルスタムの英雄譚に登場するハーブを弾く少女(第 16 図 T11-a)に見られ(Marshak2002)、女性と解釈される人物が身に着けることが多い。男性が身に着ける例は、王侯像と推定されるが(第 16 図 T11-b)(Marshak 2002: p.98)、頭光が描かれ神性を帯びた存在のようである。

3. 系譜の考察

以上の事例から三叉状肩掛けは、その起源は不明瞭だが、クシャーン朝期に遡り北方遊牧民

と関係した服飾だったと考えられる。その後、世俗像が身に着ける事例は、ヒンドークシュ・パミール以北では、エフタル系民族の表現やその支配地域に属すると考えられる資料に、以南ではアルハンの支配者像に見られた。このことから、5～6世紀の中央アジアの支配的民族であったイラン系フンに共通した習俗であったと推定され、とくにヒンドークシュ・パミール以南の地域では当時のアルハン支配者像と関係の深い服飾だった可能性がある。

世俗像以外では、「飾られた仏陀」のほか、カシミールのスーリヤ像、ペンジケントの想像上の人物像に現れた。三叉状肩掛けを持つスーリヤ像はどの事例も年代が明らかではないが、推定年代は6世紀を遡らないことから、アルハンの支配期に受容され、装身具の表現として定着した可能性が考えられる。ペンジケント遺跡の事例については、これまでに同時代の世俗像に類例が認められず、ソグド語銘文を伴う印章(T9)の存在から、エフタル支配期にソグディアナに流入し受容された結果、表現として利用されたと推定される。つまり世俗像以外的事例はイラン系フンの支配期に由来する可能性が高いと推察する。











またこの服飾の性格についても言及したい。ヒンドークシュ・パミール以北の世俗的な像では、三叉状肩掛けが芸能に関わる人物(T2, 4, 11a)の服飾として現れる。スバシ遺跡の舍利容器の図像は(T4)は、エフタル系民族の非日常なハレの場面を表し、その中の仮面をつけた非現実的な存在のうちの3人が類似の服飾を身に着けている。このことは、ペンジケントにおいて非現実世界の人物(T7, 8, 10, 11a-b)の服飾として描かれることとの関係を示唆する。また、ヒンドークシュ・パミール以南の地域において「飾られた仏陀」やスーリヤ像の礼拝像の装身具に現れることも、この服飾の特殊性と関係している可能性がある。アルハンの支配者像の例から、同地域では支配者が実際にこの服飾を身に着けていた可能性が高く、非日常の場面における特殊なものであったと推察される。

ただし三叉状肩掛けは、布地が格子状あるいは鱗状に表現されるもの(T1, T4)と円文などの装飾を伴うものに大別でき、その表現は完全には一致しない。その点を考慮せず、形状の一致から以上の服飾を同等に捉えられるのかという問題がある。格子状あるいは鱗状の表現は来歴不明の「飾られた仏陀」(BB_KB_1)にも見られ、現段階では断定できないが、このような三叉状肩掛けが他の装飾的な「飾られた仏陀」の三叉状肩掛けと同等に捉えられていたことを示唆し、世俗習俗の状況を反映している可能性があると考えられる。

Ⅲ. 「飾られた仏陀」とイラン系フン・アルハンとの関係

1. 三面三日月冠

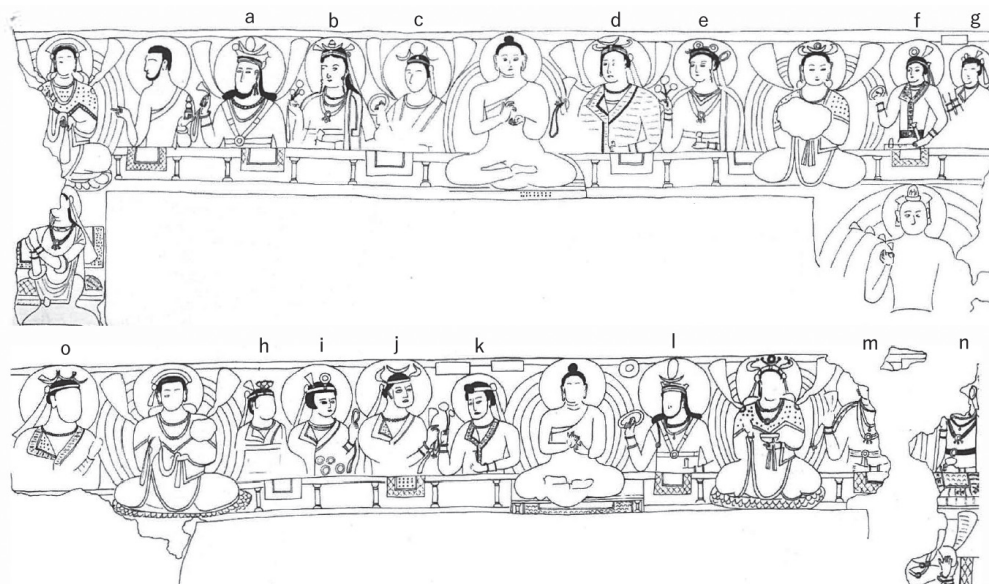
三叉状肩掛けは古くから中央アジアにみられ、北方遊牧民に共通した服飾であった可能性があるが、5世紀以降の事例は、イラン系フンと関係し、新出資料はヒンドークシュ・パミール以南のアルハンの支配者像との明確な関係を示している。イラン系フンとの関係は、一部の「飾られた仏陀」の冠飾からアルハンとの関係や供養者像を伴う事例から示され、三叉状肩掛けはこの集団と関係して受容された可能性が高い。

| | キンギラ | メハマ | ジャヴガ | 不明 |
|----------------------------|--|---|--|---|
| 5 世 紀 中 以 降 |  318 | |  50 | |
| | |  73 |  51 |  52 |
| 6 世 紀 末 |  81 | | |  113 |
| | | | |  150(var1) |
| | | |  88 |  91 |

第6図 三面三日月冠を伴うアルハン貨の王像の編年

まず冠飾からその関係を示したい。三叉状肩掛けを掛けた一連のブツダ像には三面三日月冠と総称されるダイアダム（帯状の頭飾り）上に3つの三日月を配する構成の冠飾が、地域や表現手段関わらず見られる（第2表）。この構成の冠飾はすでにイラン系フンのアルハンのキンギラ貨が初現で、この系統に特有であることが指摘されている（宮治 1981: p.27）。

改めて貨幣の事例を集成すると、ダイアダム上に3つの三日月を配する構成の冠飾は、アルハンの支配期に特有の表現であるが、その型式は多種多様存在することが確かめられた²⁾。そこでヴォンドロベツツ（Vondrovec Klaus 2014）を参考に、三面三日月冠を有する事例を編年した（第6図）。その結果、初期の事例は三日月の内側の装飾が1つのあるいは2つの小球、ピン状であるが、時代が下ると花型、三叉など複雑な装飾が表現される傾向が確認できた。「飾られた仏陀」の三面三日月冠には三日月の内側にディスク、小球のような表現を持つ事例があ



第7図 バーミヤーン遺跡の東大仏龕壁画

Tanabe2004 Fig. 9, 10 より一部改変

上段 東側壁, 下段 西側壁

るが、これらは初期のアルハン貨の王像の三面三日月冠に由来すると推定される⁴⁾。初期の事例はアルハンがガンダーラで勢力を広げる時期に位置づけられるが、同時期には三叉状肩掛けを伴うアルハンの支配者像の事例も現れる。このことから、三面三日月冠と三叉状肩掛けを併せ持つ「飾られた仏陀」はこの時期のアルハン支配に由来すると考えられる。

2. バーミヤーン遺跡の東大仏龕壁画の供養者像

バーミヤーン東大仏龕壁画は「飾られた仏陀」とイラン系フンとの関係を示す重要な事例である。この壁画は、欄干から上半身を現す王侯貴族の供養者とその中央にブツ像、左右に「飾られた仏陀」を配置する構図を取る(第7図)。「飾られた仏陀」は三叉状肩掛けを身に着け、冠飾は鳥翼冠と台形の冠の2種類が見られる(第7, 10図)。

供養者の一群の男性像には、サーサーン系の服装を身に着けている人物(第7図 a, c?, l, m?)とイラン系フンの特徴を持つ服飾の人物(第7図 d, f, g, h, i, j, k, o)がいることが指摘されている。前者のうち a, l はバーミヤーンの国王とも解され(宮治 2022)、後者は前述のエフタル系の服飾である片襟を折る上着を身に着ける。また女性像(第7図 b, e, n)は、外套/ケープのようなものを肩から羽織るが、この表現はエフタル時代と推測される資料において上述の服飾の男性像と同一場面に現れることから、エフタルの女性の服飾であると考えられ、関連が推測されている(宮治 2022)。

このエフタルの王侯貴族は多種多様な冠を身に着けているが、その中に三面三日月冠(o)

第1表 イリヤソフ・影山が指摘するエフタル支配領域下の鳥翼冠
影山 2007 表1 より一部改変

a Budrach 出土素焼き人形, 6-7 世紀; g 東大仏天井画, 6 世紀半ば;
j ペンジケント出土壁画, VI 区 1 室, 740 年頃; m キジル 77 窟 壁画, 500 年頃

| | スルハン ダリア | バラリク テベ | パーミヤン | ソグド | キジル | 中国・日本 |
|-----|---|------------|---|---|---|--|
| 鳥翼冠 |  a | |  g |  j |  m |  p |



Type287

第8図 エフタル発行
(ペーローズ第三冠模倣貨)の鳥翼冠



Type118B

第9図 パーミヤンの鳥翼冠に類似した冠飾を
持つアルハン貨の王像の例



Type61F

と鳥翼冠 (d, j) が表される。三面三日月冠がアルハン貨幣の王像に見られる冠であることは前項で確かめた。鳥翼冠はイリヤソフと影山によりエフタルが用いてその支配下で広がったことが確かめられているが (Il' yasov 2001, 影山 2007), 両者が示すエフタル支配下の鳥翼冠とパーミヤンの鳥翼冠の表現はやや異なる (第1表)。前者はキジル壁画の表現 (第1表 m) を除いて、風切羽の表現から鳥翼であることが明確だが (第1表 a, j, 第8図), 後者 (j, d) は鳥翼の輪郭のみをとったような表現で、一見すると何を表すのか分からない。翼を簡略化したような形状の装飾は、アルハン的な特徴を持つキダーラ貨とアルハン貨の一部の冠飾に類例があり³⁾、ダイヤモンド上正面の三日月の側面に配され、パーミヤンの鳥翼冠と同じ構成をとる (第9図)。これらは明確に翼を意図した鳥翼冠とは異なり、断定はできないが、イラン系フンの中でもアルハン系統の冠飾であった可能性がある。同壁画の「飾られた仏陀」の鳥翼冠も同様の表現であり、三日月の内側にディスクを内包する点で完全には一致しないが、供養者像 (j, d) のものと同系統と考えられる。そのためイラン系フンの支配者が用いた冠飾が「飾られた仏陀」に反映された可能性がある。

また、同壁画の「飾られた仏陀」に2系統の冠が見られることが供養者の2つの系統を反映しているとする、もう一方の「飾られた仏陀」の冠はサーサーン系の王像と関連するかも

しれない。しかし、実際サーサーン貨の王像には台形の冠が表される例があるが、これは特徴的な形状でなく、年代的にも隔たりがあるため、図像からはっきりとした関係性を示すことはできない。

東大仏龕壁画は、ヒンドークシュ以北でエフタルの繁栄が終焉を迎える6世紀後半の制作と放射性炭素年代で位置づけられるが（国際文化財保存修復協力センター、名古屋大学博物館2006など）、この壁画は、イラン系フンがヒンドークシュ南麓のパーミヤーンにおいては支配者層を構成する一集団であったことを示し、在地の首長のもと仏教を支持していた様子を表す。そこには「飾られた仏陀」が描かれ、同集団がこのイメージを支持したと解釈される。また現時点では推論に過ぎないが、支持した支配者の冠が反映されたことが考えられる。

V. 結論

「飾られた仏陀」に表される三叉状肩掛けと支配者の服飾との関係について考察を試みた。三叉状肩掛けのモチーフは、従来指摘されていたように、古くはクシャーン朝期のガンダーラ彫像に遡り、北方遊牧民との関係が推定された。5世紀以降の世俗像の類例から、ヒンドークシュ・パミールの北側の地域ではこの服飾の類例がエフタルの支配時期・領域と重なり、その南側ではアルハンの支配者像に表されることを指摘し、イラン系フンに共通したひとつの服飾であったと考えた。

アルハンの支配者像の類例は、当時影響力を持った集団の首領の服飾として表現される点が特徴で、そのような有力者の服飾として現れる例は他に見られない。一部の「飾られた仏陀」が身に着ける三面三日月冠も、アルハンの支配者像との関係を示唆する。また「飾られた仏陀」の分布は、現在アフガニスタン東部から北部インド・パキスタンに集中し、アルハンが影響を及ぼした地域と重なることも捉えられる。そのため「飾られた仏陀」がこの集団の支配者の影響力下で形成され、展開したことが推察される。一方で、三叉状肩掛けの類例がクシャーン朝期に確認できることから、イラン系フンの支配以前に肩掛けによる荘厳が成立していたことも想定される。しかし現段階で明確に、クシャーン朝期とイラン系フンの支配期に位置づけられる「飾られた仏陀」以外の三叉状肩掛けの事例は知られていない。いずれにせよ、三叉状肩掛けと三面三日月冠の両要素をもつ「飾られた仏陀」は、アルハンの支配期を遡らず、その支配者像の影響を受けて成立したと考えられる。

以上の図像的な関連から、当時の支配者と仏教、「飾られた仏陀」との関係を明らかにすることはできないが、パーミヤーン遺跡の東大仏龕壁画の事例は「飾られた仏陀」が支配者層に支持されていたことを示し、支配者との関係においてその服飾が図像のなかに反映されたことも推察される。

本稿では「飾られた仏陀」図像の比較からこのイメージをアルハンの支配者像との関係を指摘した。「飾られた仏陀」とアルハンとの関係を変容を明らかにするためには、それぞれの事例の年代を検討し検証を行う必要があるが、その議論については稿を改めたい。

謝辞

本稿は2022年度提出の卒業論文の一部を加筆、修正したものである。卒業論文の執筆にあたり、指導教員である谷口陽子先生、筑波大学先史学・考古学コースの先生方には多大なるご指導、ご教示をいただいた。末筆ながら厚く御礼申し上げます。

註

- 1) この論考において宮治は、当時まだ不確定であったバーミヤーン主崖窟壁画の年代を「飾られた仏陀」と世俗の支配者との関係から明らかにしようと試み、その装身具の系譜に注目した。そのため冠飾の考察はバーミヤーンの事例に限られた。
- 2) アルハン造幣が4世紀末に始まり6世紀末まで継続すると考えられ、銘文から複数の王名が知られている (Afram and Pfisterer 2010, Vondrovec 2014)。
- 3) Type105, 106はヴォンドロベッツ (2010) とタンドン (2013) が示す分類番号で、ゲーブル (1967) に基づく。イラン系フンの貨幣研究ではゲーブルの分類番号を基本としており、以降本稿で示す Type から始まる分類番号はこれに基づく。
- 4) 本稿では字数の制約上取り上げないが、カシミールでは「飾られた仏陀」をはじめとする仏教やヒンドゥー教の礼拝像に内側に花型の装飾を持つ三面三日月冠の表現が広く用いられるが、型式化している点から同時代の支配者像の冠に直接影響を受けたものではないと推定する。
- 5) 図で示した例以外に、Type77, 82, 147Aに同様の装飾が見られる。ヴォンドロベッツ (2014) はこれらの表現を暫定的にパルメットと呼称している。翼とも植物とも捉えられ、何を象徴したものであるか不明である。

中央アジアにおける「飾られた仏陀」と支配者

第2表 「飾られた仏陀」の事例一覧

| 地域 | 番号 | 発見地 | 年代 | 所在・収蔵場所 | 大きさ | 表現方法 | 冠飾 | 肩掛けの形状 | 縁取り | 縁のフリンジ裝飾 | 三叉杖の特徴 | |
|----------|---------------------------|----------------------------------|--|---------------------------|-----------------------|-------------|--------|--------------------|--------------|----------|---|----------|
| | | | | | | | | | | | 布地の裝飾 | 複数の円文・矩形 |
| ガンダーラ | BB_GD_1 | タキシラ・ジャウリアン寺・春獻 塔A11西側面(左)3層目 | 4-6世紀 | — | h.約60cm | 塑像 | — | 三叉杖 | なし | なし | 複数の円文・矩形 | |
| | BB_GD_2 | ハツダ(詳細な出土地不明) | — | ギタ美術館 | — | — | 三叉杖 | 紐状 | なし | なし | 複数の円文・矩形 | |
| | BB_GD_3 | メルブ | 5世紀後半-6世紀初頭 | サマルカンド国立大学 | 13.2cm x 12.6cm | 埋仏 | 三面三日月冠 | 三叉杖 | 紐状 | なし | 肩正面に円文? | |
| | BB_BM_1 | 西大仏龕(60窟) | 7世紀前半 | — | 壁画 | — | 三面三日月冠 | 水琴琵琶形 | — | — | 大小複数の円文・裝飾 | |
| | BB_BM_2 | XII洞(740窟) | 7世紀前半以降9世紀末 | — | 壁画 | — | — | 三叉杖 | 帯の上部を連珠が縁取り? | なし | 複数の円文 | |
| | BB_BM_3 | I洞(500窟) | 7世紀後半-8世紀後半 | — | 壁画 | h.35cm | 山型冠 | 三叉杖 | 連珠 | あり | 複数の円文・矩形 | |
| | BB_BM_5 | E洞(1227窟) | 7世紀後半-8世紀後半 | — | 壁画 | h.40cm | 三面三日月冠 | 水琴琵琶形 | — | — | 複数の円文・矩形? | |
| | BB_BM_6 | Sa洞(176窟) | 7世紀前半 | — | 壁画 | h.15cm | 合形冠 | 三叉杖 | — | — | — | |
| | BB_BM_7 | 東大仏龕東側壁・北 | 6世紀後半 | — | 壁画 | h.約120cm | 合形冠 | 三叉杖 | 帯状 | あり | 複数の円文 | |
| | BB_BM_8 | //西側壁・南 | 6世紀後半 | — | 壁画 | h.約120cm | 合形冠 | 三叉杖 | 帯状 | あり | — | |
| BB_BM_9 | //東側壁・南 | 6世紀後半 | — | 壁画 | h.約120cm | 扇型冠 | 三叉杖 | 帯状 | あり | — | | |
| BB_BM_10 | //西側壁・北 | 6世紀後半 | — | 壁画 | h.約120cm | 扇型冠 | 三叉杖 | 帯状 | あり | 両面に円文 | | |
| BB_BM_11 | フネラーディー-E窟 | 7世紀末-8世紀後半 | — | 壁画 | — | — | 三叉杖 | — | — | — | | |
| BB_BM_12 | // | 7世紀末-8世紀後半 | — | 壁画 | — | — | 三叉杖 | — | — | — | | |
| BB_BM_13 | // | 7世紀末-8世紀後半 | — | 壁画 | — | — | 三叉杖 | — | — | — | | |
| BB_KB_2 | フォンドキスタン遺跡D出土泥像 | 7世紀後半-8世紀後半 | — | ギタ美術館 | h.49cm | 壁画 | — | 三叉杖 | 連珠 | あり | 複数の花型 | |
| BB_KB_3 | タバ・サルダール第23洞型出土仏 | 7世紀後半 | — | — | h.3.7m(推定) | 壁画 | — | 三叉杖 | — | — | — | |
| BB_GK_2 | — | 714 | Asia Society in New York, in the Mr. and Mrs. Rockefeller 3rd Collection | 緋合金線 | h.31.1cm | — | 山型冠 | 三叉杖 | 磨耗しているが連珠 | あり | 正面と側面に矩形1つずつ・両肩以上に三日月裝飾 | |
| BB_GK_3 | — | 715 | 個人蔵 (Pritsher Collection) | 緋合金線 | h.36.8cm | — | 山型冠 | 三叉杖 | 連珠 | あり(2層) | 正面と側面に矩形1つずつ・両肩以上に三日月裝飾 | |
| BB_GK_4 | タルバン・ギルギット | 630年以前 | — | 個人蔵 (Pritsher Collection) | h.101cm, b.36cm | ベトロゴ リアフ | 山型冠 | 三叉杖 | 帯状にドット列 | なし | 正面時層にアーモンド形を内包した三日月 | |
| BB_GK_12 | — | 679/680 | Potala Collection; Sa gum lha khang; inventory no.82, Red Palace, Lhasa, Tibet | 緋合金線 | h.20.5cm, w.20.2cm | — | 山型冠 | 三叉杖 | 紐状・帯間隔に二重線 | あり | 正面に矩形・両肩以上に三日月裝飾 | |
| BB_GK_10 | バリハル・サハラ | 8世紀前半 | Sri Pratap Singh Museum, Srinagar | 石像 | — | — | 三面三日月冠 | 三叉杖 | 帯状に連珠 | あり | 正面に大小2つの矩形・両肩以上に三日月裝飾 | |
| BB_GD_4 | — | 6世紀-7世紀中頃? | 個人蔵 | 壁画 | 51.5cm | — | 三面三日月冠 | 三叉杖 | 紐状 | あり | 複数の円文・矩形 | |
| BB_KB_1 | — | 6-8世紀 | — | 緋合金線 | — | — | なし | 三叉杖 | 帯状で等間隔に区切り | なし | うろこ状 | |
| BB_GK_1 | — | 7世紀 | Jo khang/gi Tsug lag khang Collection; inventory no. 644, Lhasa, Tibet | 緋合金線 | h.14.4cm | — | 山型冠 | 三叉杖 | 連珠 | あり | 正面に3つの円文・各側面に1つ?の円文 | |
| BB_GK_5 | — | 7世紀後半-8世紀初頭/ 9-10世紀 | 個人蔵(Private Collection New York) | 緋合金線 | — | — | 山型冠 | 三叉杖 | 連珠 | あり | 正面と側面に矩形1つずつ・両肩以上に三日月裝飾 | |
| BB_GK_6 | 北都インド・ バキスタン/ カンミール | 7-8世紀 | Potala Collection; Li ma lha khang; inventory no.221 | 緋合金線 | h.17.5cm | — | 三面三日月冠 | 三叉杖 | 連珠 | あり | 側面に複数の裝飾?・両肩に三日月裝飾(大きな首 掛け?により正面確認できず) | |
| BB_GK_7 | — | 10-11世紀 | Potala Collection; Li ma lha khang; inventory no.805 | 緋合金線 | h.18cm, w.36cm | — | 山型冠 | 三叉杖 | 連珠 | あり | 側面に裝飾? | |
| BB_GK_8 | — | 10-11世紀 | Jo khang/gi Tsug lag khang Collection; inventory no.23(B) | 緋合金線 | h.18cm, w.26cm | — | 山型冠 | 三叉杖 | 紐状 | あり | 正面に円文・両肩に三日月裝飾 | |
| BB_GK_9 | — | 8-9世紀 | The Metropolitan Museum of Arts, Gift of Ben Heller(1970/297) | 緋合金線 | h.52.0cm | — | 三面三日月冠 | 三叉杖 | 連珠 | あり | 両肩に三日月裝飾 | |
| BB_GK_11 | — | 9-10世紀 | New York Metropolitan Museum, Krones Collection | 象牙彫刻 | h.13.6cm, w.11.1cm | 彫 | 山型冠 | 三叉杖(座部と 僧衣の融合?) | 連珠 | あり | 両肩に三日月裝飾 | |



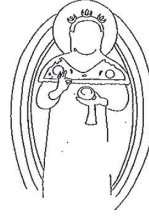
西大仏龕
(BB_BM_1)



740窟
(BB_BM_2)



i洞
(BB_BM_3)



Ee洞
(BB_BM_5)



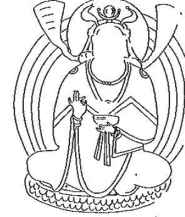
Sa洞
(BB_BM_6)



東大仏龕東側壁
(BB_BM_7 BB_BM_9)



東大仏龕西側壁
(BB_BM_8 BB_BM_10)



第10図 バーミヤーン主崖窟壁画の「飾られた仏陀」



第11図 ギャウル・カラ遺跡出土粘土板の「飾られた仏陀」
(BB_GD_3)



第12図 ギルギットの銅合金像の「飾られた仏陀」(BB_GK_2)



第13図 パーリハサプーラ出土石像の「飾られた仏陀」
(BB_GK_10)

第3表 三叉状肩掛けの事例

| No | 地域 | 所在 | 年代 | 補足 |
|------|---------------------------|-----------------------------|-------|-------------------------------|
| T1 | ガンダーラ, タッカル | ラホール博物館 | 3世紀 | バーンチカ神像の供養者像 |
| T2a | コータン, ヨートカン | — | 5世紀～ | 楽人? |
| T2b | コータン, ヨートカン | — | 5世紀～ | 楽人? |
| T4 | クチャ, スバシ | 東京国立博物館 | 7世紀 | 舍利容器の図像に3例 |
| T5 | 不明 | 平山郁夫シルクロード美術館 | — | クシャーン系王侯像 |
| T6 | ガンダーラ | — | — | 王侯供養者像 |
| T7 | ベンジケント, Room 50/ XXIII | エルミタージュ美術館, ルダキ歴史郷土博物館 | 740年頃 | 英雄譚・王女(ルスタムの娘?) |
| T8 | ベンジケント, Temple I | — | 740年頃 | 女?神像 |
| T9 | — | 大英博物館・BM19999 | — | ソグド人?エフタル人?の男女 のStamp Seal |
| T10 | ベンジケント, Room17/ III | バーミンガム美術館 | 740年頃 | 英雄譚・馬に乗る女性像 |
| T11a | ベンジケント, Room41/ VI | — | 740年頃 | ハーブを弾く少女像 |
| T11b | ベンジケント, Room41/ VI | — | 741年頃 | 男性王族?像 |
| T12 | カシミール? | ニューデリー国立博物館, No. 67.158 | 6世紀 | スーリヤ像 |
| T13 | カシミール | ラホール博物館 | — | スーリヤ像とその帰依者 |
| T14 | アフガニスタン/カシミ ール | 個人蔵 Gift of Nei Kreitman | 8世紀 | スーリヤ像 向かって右の帰依者? |
| T15 | カシミール | メトロポリタン美術館 | 7世紀? | スーリヤ像 |
| T18 | カシミール | メトロポリタン美術館 | — | スーリヤ像 |



T1



T5



T6

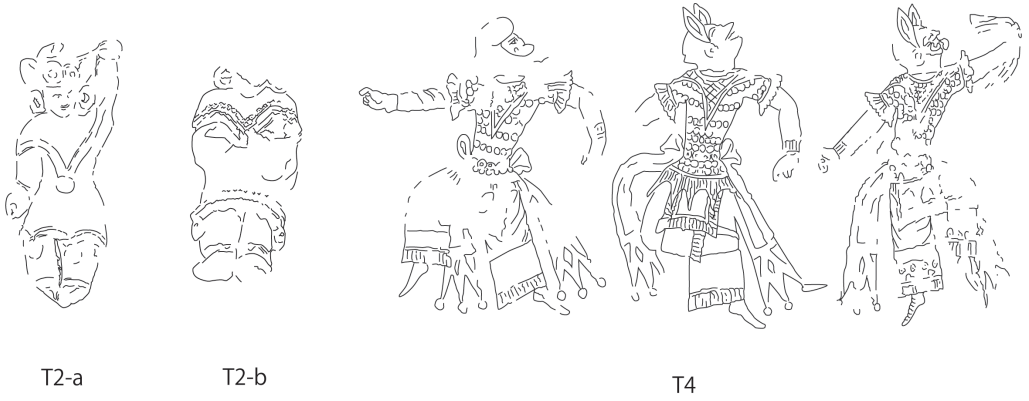


T9

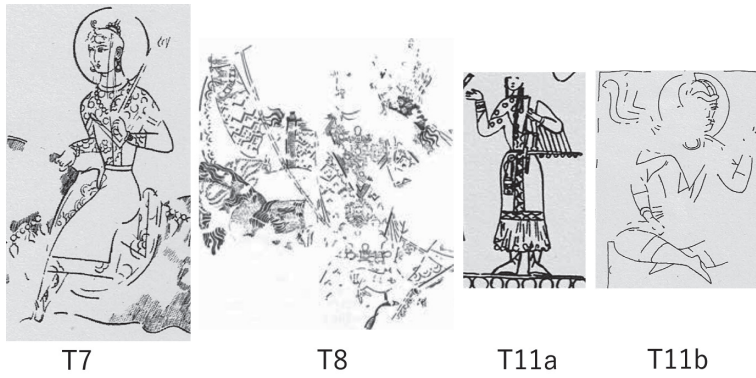


T10

第14図 三叉状肩掛けの類例 (T1, T5, T6, T9, T10)



第15図 三叉状肩掛けの類例 (T2a, T2b, T4)



第16図 三叉状肩掛けの類例 (T7, T8, T11a, T11b)

T7, T11a, T11b Marshak2002 Fig. 60-1, 30, 48, T8 Compareti2013 Fig.6 より一部改変



第17図 三叉状肩掛けの類例 (T12)

参考文献

- Alram, Michael, Pfisterer, Matthias. 2010 Alkhan and Hephthalite Coinage. *Coins, Art and Chronology II*, Michael Alram, Dborah Klimburg-Salter, Minoru Inaba, Matthias Pfisterer(eds.), pp.13-38.
- Comparati, Matteo. 2014 Some Examples of Central Asian Decorative Elements in Ajanta and Bagh Indian Paintings. *The Silk Road*, 12, pp.39-48.
- Cribb, Joe. 2010 The Kidarite, The Numismatic Evidence. *CACII*, pp. 91-146.
- Errington, Elizabeth. 2010 Differences in the Patterns of Kidarite and Alkhan Coin Distribution at Begram and Kashmir Smast. *CACII*, pp.147-168.
- Göbl, Robert. 1967 *Dokumente zur Geschichte der Iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*. Otto Harrassowitz, Wiesbaden, vol.1-4.
- Il' yasov, Jangar Ya. 2001 The Hephthalite Terracotta. *Silk Road Art and Archaeology*, 7, pp.187-200.
- Klimburg-Salter, Deborah. 1989 *The Kingdom of Bamiyan: Buddhist Art and Culture of the Hindu Kush*. Naples, Rome: Intituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- Kurbanov, Aydogdy. 2014 The Hephthalite : iconographical materials. *Tgragetiya*, VIII, pp.317-334.
- Kuwayama, Shojin. 2002 *Across the Hindukush of the First Millennium: a collection of the papers*. Institute for Research in Humanities, Kyoto University.
- Marshak, Boris I. 2002 *Legends, Tales, and Fables in the Art of Sogdiana*. Bibliotheca Persia.
- Rosenfield, John M. 1967 *Dynastic Art of Kushan*, University of California Press.
- Sharma, Brijendra Nath. 1979 Sculptures and Bronzes from Kashmir in the National Museum, New Delhi. *East and West*, 29, 1/4, pp.131-137.
- Tanabe, Katsumi. 2004 Foundation for dating anew the 38meter Buddha at Bamiyan: Der liebe Buddha steckt im Detail, *Silk Road Art and Archaeology*, 10, pp.177-223.
- Tandon, Pankaj. 2013 Notes on the Evolution of Alchon Coins. *Journal of the Oriental Numismatic Society*, 216, pp. 24-34.
- Vondrovec, Klaus. 2008 Numismatic Evidence of the Alchon Huns reconsidered, *BUFM*, 50, pp. 25-56.
- Vondrovec, Klaus. 2010 Coinage of the Nezak. *CACII*, pp.169-190.
- Vondrovec, Klaus. 2014 *Coinage of the Iranian Huns and their successors from Bactria to Gandhara(4th to 8th century CE)*. Verlag der Osterreichischen Akademieder Wissenschaften.
- 稲葉 穰 2004 「アフガニスタンにおけるハラジュの王国」『東方學報』第76冊 382-313頁.
- 影山悦子 2007 「中国新出ソグド人装具にみられる鳥翼冠と三面三日月冠」『オリエント』第50巻2号 120-140頁.
- 国際文化財保存修復協力センター, 名古屋大学博物館 2006 『アフガニスタン文化遺産調査資料集 第2巻 パーミヤーン仏教壁画の編年』明石書店.
- 前田たつひこ 2003 「「飾られた仏陀」に関する一考察」『和光大学表現学部紀要』第4巻 159-173頁.
- 宮治 昭 1981 「パーミヤンの「飾られた仏陀」の系譜とその年代」『佛教芸術』第137巻 11-34頁.
- 宮治 昭 2022 「生き続けるパーミヤーン—大仏破壊の前とその後, 現在・未来へ」『遺産テキスト学の創成』木俣元一, 近本謙介(編), 勉誠出版, 5-44頁.

出典一覧

第1表: 影山 2007 表1 より一部改変。

第2・3表: 筆者作成。

- 第1・2地図：筆者作成。
- 第1・2図：宮治1981図10より一部改変。
- 第3図：宮治1981図1より一部改変。
- 第4図：The British Museum: https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1963-1210-1 からトレース。(参照2022.12.10)
- 第5図：Type105はVondrovec2008 p.28の該当貨幣, Type106はTandon2013 Coin35の像をトレース。
- 第6図：Vondrovec2014の該当貨幣の像をトレースし, 筆者作成。
- 第7図：Tanabe2004 Fig.9,10より一部改変。
- 第8図：Vondrovec2014 p.409を基にトレース。
- 第9図：Vondrovec2014の該当貨幣を基にトレースし, 筆者作成。
- 第10図：宮治1981図1,2,3,7,8,9,10より。
- 第11図：Baums2009 Fig.3を基にトレース。
- 第12図：Rubin Museum of Art, Crowned Buddha Shakyamuni, <https://rubinmuseum.org/collection/artwork/crowned-buddha-shakyamuni-1979-044> を基にトレース(参照2022.12.10)。
- 第13図：Klimburg-Salter1989 Fig.41を基にトレース。
- 第14図：T1 Rosenfield1967 Pl.62-a, T5 前田2003図13, T6 栗田1988 No.52, T9 British Museum https://www.britishmuseum.org/collection/object/W_1870-1210-3 (参照2022.12.10), T10 Marshak2002 Fig.30を基にトレース。
- 第15図：T2a British Museum https://www.britishmuseum.org/collection/object/A_1902-1220-356 (参照2022.12.10), T2b 宮治1981図12, T4 文化遺産オンライン <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/454891> (参照2022.12.10) を基にトレース。
- 第16図：T7, T11a, T11b Marshak2002 Fig.60-1, 30, 48, T8 Compareti2013 Fig.6より一部改変。
- 第17図：Sharma1979 Fig.6を基にトレース。

山根萌々花 (筑波大学人文学類)

The “Bejewelled Buddha” and Past Rule in Central Asia

YAMANE, Momoka

This article aims to elucidate the relationship between the so-called “Bejewelled Buddha” and past rule in Central Asia by focusing on its unique clothing, namely, its three-pointed cape and other elements.

New archaeological materials reveal that the three-pointed cape resembles clothing seen in portraits of rulers by the Alkhan, a tribe of Iranian Huns. Although their origin is still unclear, other examples of this clothing suggest that it was worn by nomads in the Kushan period (C. E. 1st-3rd) and later widely adopted by Hephthalite and Alkhan Huns. In the northern regions of Hindukush and Pamir, the cape appeared to Iranian Huns, spread with Hephthalite expansion, and several examples indicate it was used to dress mythic figures.

A relationship between the “Bejewelled Buddha” and the Iranian Huns is also suggested by other elements. First, the triple-crescent crown, consisting of three crescents on the diadem, is worn by the “Bejewelled Buddha” and the ruler portrayed on Alkhan coins, and is considered to be characteristic of the reign. In addition, a wall painting in the niche surrounding Bamiyan’s Eastern Giant Buddha suggests that Sasanian-oriented local rulers and nobility among Iranian Huns were devoted to the “Bejewelled Buddha”

Considering examples on hand of the three-pointed cape and its devotees, the “Bejewelled Buddha” may be related to the Iranian Huns. More specifically, the triple-crescent crown and three-pointed cape appear to relate to Alkhan rulers, and this may indicate that the location of the “Bejewelled Buddha” relates to Alkhan control.